

## 時のしるしを理解する ヨハネによる福音書 6:1-13

- その後、イエスはガリラヤの湖、すなわち、テベリヤの湖の向こう岸へ行かれた。大ぜいの人の群れがイエスにつき従っていた。それはイエスが病人たちになさっていたしるしを見たからである。(6:1-2)
  - ヨハネの福音書は他の3つの福音書と多少異なる特徴がある。その一つは神秘が明かされる時、ヨハネはたとえ話ではなくしるしを使うということである。しるしにはこれから来る現実を示し、私たちがその準備をする、という意味がある。
  - イエスが病人たちに対して行ったしるしは、私たちが完全にされるのはイエスのみ、というすばらしい事実を暗示している。完全とは神から来るものであり、わたしたちはさらに完全にされていくというすばらしい現実が待っている。
  - イエスのいやしは打ちひしがれた人々の心をとらえた。いやしはたしかにすばらしいしるしであるが、聖霊のみが私たちの心を変え、父の御心のみが人の心をイエスへと向ける。それでは私たちには自由意志があるのだろうか？答えは yes である。人は神の御心に従うこともできるし拒絶することもできる。神の御心に反することはメディア、教育システムなど様々なはげ口から押し流されている。
- イエスは山に登り、弟子たちとともにそこにすわられた。さて、ユダヤ人の祭りである過越が間近になっていた。イエスは目を上げて、大ぜいの人の群れがご自分のほうに来るのを見て、ピリポに言われた。「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。」もっとも、イエスは、ピリポをためしてこう言われたのであった。イエスは、ご自分では、しようとしていることを知っておられたからである。(6:3-6)
  - 過越の祭りが間近だったので群衆や交通量が増え、人々の神に対する意識も高まっていた。
  - イエスはピリポに質問をするが、イエスが質問をする時というのは情報が必要だからではなく、ここにもあるように相手の心をためすためである。
  - 今あなたはどんなことを問われているだろうか？今あなたが直面している問題はもしやすると私たちがどう応答するかをためすための神からのテストかもしれない。より深い信頼を神に置くのか、あるいは他のものに置くのかは私たち次第である。
- ピリポはイエスに答えた。「めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」弟子のひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。「ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。」イエスは言われた。「人々をすわらせなさい。」その場所には草が多かった。そこで男たちはすわった。その数はおよそ五千人であった。(6:7-10)
  - ピリポは7か月分の賃金があってもこの群衆を食べさせることはできない、と現実的な回答をする。それに対しアンデレの答えは非現実的で、イエスのもとに一人の少年を連れてくる。ヨハネの福音書の中ではアンデレはいつも誰かをイエスに紹介している。
  - イエスはしるしを行うにあたりまず人々を草の上に座らせる。人々を緑の牧場に伏させる良い羊飼いである。しかしこの話にはすでに至る所にしるしが見られる。過越の祭りやパン、これらの要素はすべてこれから来るものを神が私たちに示そうとしているしるしである。
  - 私たちの生活の中で神がテストを与える時、あらゆるしるしに注意すると良い。それは人生のどの分野においてもいえるが、特に神との関係においてのしるしに敏感になることが大切。
- そこで、イエスはパンを取り、感謝をささげてから、すわっている人々に分けてやられた。また、小さい魚も同じようにして、彼らにほしだけ分けられた。そして、彼らが十分食べたとき、弟子たちに言われた。「余ったパン切れを、一つもむだに捨てないように集めなさい。」彼らは集めてみた。すると、大麦のパン五つから出てきたパン切れを、人々が食べたうえ、なお余ったもので十二のかごがいっぱいになった。(6:11-13)
  - イエスはいのちのパン。このしるしはただ共にあずかるだけでなく、主から受けたものを食することの重要性を示している。
  - 群衆は十分に食べた（しかも今まで食べたこともないほどおいしいパンだった）にもかかわらず、このしるしの意味を理解せずイエスから離れてしまう。それはイエスがなされたことが気に入らなかったわけではなく、イエスが彼らに求めたことを飲み込むことができなかったのである。
  - 私たちの信仰生活においても、「神から何を受けられるだろうか」という考え方から、「どうしたら神に栄光を帰せるだろうか」という姿勢へと成長していくことが大切である。